

日本文學讀本を讀む

土屋 博

「日本文學讀本」(東京日日新聞・大阪毎日新聞、昭和十五年刊、定價一圓二十錢、二〇〇頁)古書價格三百圓也。

大新聞社主催の紀元二千六百年記念事業「文藝大講演會」(午後五時より十時半迄)の全記録なり。五千人を超える聴衆、一人といへども中座する者無し。千葉より來れる數人の若き女性達、その夜到底歸宅叶はざることを知り宿舎豫約を余儀なくせられたる由。

序は久米正雄、日本文學概論は菊池寛、上代文學は折口信夫、王朝文學は小島政二郎、戰記文學は白井喬二、江戸文學は笹川臨風、俳句文學は室生犀星、幕末文學は村松梢風、明治文學は木村毅、現代文學は横光利一、通俗文學は吉屋信子の担当なり。

菊池寛曰く、「學者太宰春臺、和歌の稽古には萬葉集の如き昔の和歌集を千遍讀めと言へり。若し小生刑務所に入る際には差し入れとして萬葉集を頼みまし。」と。折口信夫曰く、「古事記、日本紀、人の口移しをすぐ様記録したるものとは見えず。」と。小島政二郎曰く、「今昔物語に第一流の文學的價值ありと認めたる芥川龍之介にはその功勞にて博士號をやりまし。平安朝時代の上の生活と下の生活全て今昔物語の中に包括せられたる點こそ面白けれ。」と。白井喬二曰く、「近畿の豪族、鎌倉に戻れぬ經に軍事講演を依頼せり。そは戰記ものの貴重なる材料となれり」と。村松梢風曰く、「川越の松平家、日露戦争の頃まで日本外史の版權を持ち続け、天保十五年よりほぼ六十年に亙り年々一萬部に近き本を出版せり。川越の殿様のお屋敷は赤坂の靈南坂にあり其處に出版所を造り川越版の日本外史を發行せり。」と。

豪華講師陣の魅力溢るる語り口、八十年の時を経て、古書蒐集の醍醐味、まさに此処にあり。

(令和元年四月十日受附)